

## 48年の女性像（2一つづき）

加 藤 節 子

——Eugénie Niboyet——

48年の有名な婦人新聞 *Voix des Femmes*（女性の声紙）に入る前に、一言つけ加えておかねばならない。前述した *Conseiller des Femmes* 紙や *Mosaïque Lyonnaise* 紙に演劇欄をもうけて彼女が執筆していたことからもうかがえるように、Niboyetは演劇にも関心をもち、フランスの作家がすべて試みたように、劇作に手をそめ舞台にのせようとしたことが、残されたわずかな書簡にみることができる。

1846年2月の書簡では *Mlle Clairon* という作品のオデオン座での脚本審査を頼んでいるし、また *Oeil du Diable*（演劇紙？）に何篇かの演劇批評を載せていることもわかる<sup>1)</sup>。1843年にも道徳協会会長ロッシュフーコー＝リアンクール男爵に宛ててオデオン座を道徳的演劇、健全な演劇を上演する劇場にしたいというニボワイエらしい書簡がある<sup>2)</sup>。しかしA. Lucasの引用している M. de Lavarenne というある反動家の書いたニボワイエ批判によれば<sup>3)</sup>、彼女の *Protecteur* という家庭劇が上演されたが、ひどい失敗であったということである。この分野ではうまくいったとは思えない。

さて「女性の声」紙に入ろう。これが創刊された経緯は前回の冒頭で述べたが、彼女のジャーナリストとしての立場はリヨン以来一貫しており、ブルジョア女性としてのニボワイエが女性の教育を目的とした新聞をつくることである。「教え、物を書くことに使命をもつ人は姉妹の進歩のためにその知識を傾けるべき時である。」<sup>4)</sup>と書いているが、彼女自身、女性の知識を高める仕事を

一生の使命としてきた。

二月革命の後、保証金制度が廃止されて、あらゆる立場の新聞が無数に創刊され、ひしめきあっていた。その中でも「女性の声」紙は唯一の女性新聞として特異な存在であり、編集長のニボワイエの名も高くなる。しかし彼女の著名度が高まるにつれて、*Charivari* 紙や *Liberté* 紙を筆頭に多くの新聞で彼女はカリカチュアの格好の対象となつたのである。彼女の名は「女性の声」紙の編集長として後世に残るのであるが、彼女にとってこの「女性の声」紙時代は苦しみの時代であり、決して誇らしい思い出として想起しないのである。*Vrai Livre des Femmes* の後書きをみよう。

「私はいくつかの新聞を創刊した、即ち、  
リヨンで、Conseiller des Femmes, Mosaïque Lyonnaise,  
パリで、Ami de Famille, Paix des deux Mondes, Avenir, Voix des  
Femmes.

この最後のものは1848年に発行されて、私の人生の最も苦しみにみちた時期であった。」

革命の翌日、友人に会いに行く途中、武器をもった男女の一群を見た彼女は「女工たちを教育して共和国を過激から滅びることのないようにしようと決心した。」「これは真直な心と勇気があればできることだろう。私はそれを持っていて。それが私の不幸であった。それは私の力をこえるものであった。」

新聞の見本号を出すとその「成功は予想をこえ、その日の終りに私のサロンは演壇に変り、私のアパートは講義室に変貌した。私は私の仕事の大きさに恐れをなした。そしてこれらの女性みなに助力を求めた。『私』の新聞という言い方をやめて、『私たちの』新聞と言った。」刻々と読者はふえていった。「あるものは書記に、あるものは会計係になり、あるものは教え、あるものは組織した。我々は失業女工たちの仕事を手に入れようと努力した。ここで我々の行動をストップすべきであった。しかし生まれたばかりの事務局で皆が平等の権利をもっていると信じ、何も調整がきかなくなっていた」と述懐している。執筆者はニボワイエをはじめ、Désirée Gay, Suzanne Voilquin, Jeanne-Marie などサンニシモン派のプロレタリア女工新聞 *Tribune des Femmes* を編集していた女

性たち, Elisa Lemonnier, Jeanne Deroin, Gabriel Soumet などやはりサンニシモン主義を通ってきた女性, Anaïs Ségalas, Eugénie Foa, Amable Tatsu ら *Journal des Femmes* の執筆者であったブルジョア女流作家, 他に女流芸術家や作家 Claude Vignon, Antoine Saint-Gilles, Hermance Leguillon, Henriette, また外国人 Ann Knight, Bettina d'Arnan や多くの女工たちの投書もある。息子 Paulin Niboyet や Lachambaudie, E. Legouvé, Jenus などの男性も執筆している。しかしながら元サンニシモン主義者たちの再会の感が強く、デジレ・ゲー, ヴォワルカン, マリニポーリンたち *Tribune des Femmes* の編集者たちの色彩を濃くやどしている。

この新聞は3月20日に第1号, 2号3月22日号から日刊にすることが記されている。4月28日から1ヶ月間, 5月28日までの休刊があり, その後は2~3日の間隔で再刊されるが, まもなく46号6月18日~20日号で終刊となっている。この休刊の理由は判然としないが借金で発行不能になったのかもしれない。この休刊の間にかなり烈しく政治情勢が変化している。4月23日立憲議会のための普通選挙の結果, 保守派の勢力が強くなり, ルイ・ブランはリュクサンブル委員会から追われる。更に5月15日はポーランド支援を口実にしたデモ隊が議会に乱入して, ブランキ, バルベスをはじめとして多数の労働者の指導者たちが逮捕される, リュクサンブル委員会の解散といった事件が次々とおこり, 急速に反動化していく。更に終刊直後には国立作業場廃止が決まって, 労働者が蜂起し, 6月事件となる。

まず新聞創刊の趣旨からみてゆこう。副題は「社会主义的政治新聞, 全女性の利益の機關紙」となっている。「*Voix des Femmes* は女性に開かれた最初にして唯一のまじめな新聞である。女性の精神的, 知的, 物質的利益がここで腹蔵なく語られる。この目的のために我々は全女性の賛同を得ることを望む。我々は単に新聞の発行のみでなく, 女性のために実用書の図書館もつくるであろう。我々が力を併せて努力することにより国家と家族を助けることができよう。連絡先 grand'rue verte の E. Niboyet 宛」というのが発刊の趣旨である。この趣旨に忠実にこの新聞は女性問題を終始真正面から扱っている。扱われた問題を大別すると, 女性の社会的政治的権利, 女性の労働問題, 女性の教育,

そして離婚問題などに分類されよう。

### (1) 社会的、政治的権利

第一号に『信条告白』と題して二月革命の成功を喜び、女性の市民権を要求するニボワイエの論があり、「自由で聰明な政府の中で、光はすべてのもののためにあり、それは正義の望むところである。男と女は、賢明な結合の法の下で、社会的個人を形づくり、男女それぞれの本性によって異った方法によるにしても、同じ目的に邁進するであろう。」新しい政府にかける期待の大きさが感じられる。女性として共和国に参加する意気込みにあふれ、「一国の道徳性は女性の道徳性にかかっている。」「男にだけ、人類はわれわれだと言わせまい。労働の隸属と共に女性の隸属をやめよう。」「公共の安寧が問題であるとき、(男女) 各々がその代表をださないのはおかしい。」「最も頭のわるい(男性) 市民も投票権をもつ時、最も頭のよい女性に選挙権を与えないのはどういうことか」と述べて、Rachel, Sand, Marie Dorval, Marie Pleyel など第一線で活躍する女性の名を例にあげている。しかし、「我々は世の中に混乱をひきおこそうとしているのではない、が世の中の安寧のために女性の考え、感情の表現の機関の役割りを果したい。」彼女の論説は大体 *Citateur Feminin* に載せた三篇の投稿をに沿ったものであるが二月革命という時代の転換に希望を托し、それらより一步ふみだした信条告白となっている。

No 3 では『女性の社会運動への参加』という題で平和と秩序という社会の一般的な志向に目をつむってはならないと述べて、過激な街頭デモをしないように説く。男性の役割と女性の役割とを分け、「女は平和の使命、結合する使命をもつのであり、直ちにそれを行動に移すべきである。知性と力は男性のもの、心は女性のもの、女は人の心を鎮め、インスピレーションを与え、道を示す役、男はその道をたどる役、女性が時代に、男性に勝つのは街頭ではない、家庭である。」おそらく騒然となってきた街頭デモを抑えようとするブレーキ役になったニボワイエの論説であろう。一方同号には Antoine André de Saint Gilles を代表とする様々の職業婦人たちの臨時政府に宛てた陳情書掲載の依頼があったとして『女性たちよ！』をのせている。「昔キリスト教の公会議で『女には

魂があるか』という大問題が提示され、三票の差で『ある』ことが決められた。こうして女性は男性と同じものとして仲間入りを許された。こうした歴史にみならって、今日この問題に答えていただきたい。『女性は政治的・社会的权利があるか、極端な力仕事でないあらゆる職業において男性と同等のものと認めうるであろうか』に答をいただきたい。』

「自由、平等、友愛は一つにして、分ちがたいものと宣言された。男性の自由、平等、友愛は女性のものもあると信ずるものである。」

「あなた方は新しい時代、民衆が権力者の時代がきたという。ところで民衆とは男女両性からなるものと考えるがどうであろうか。」

「あなた方は無能なものからも選挙権をとりあげないという。あなた方は不名誉な罪の受刑者からのみ市民権をとりあげるという。ところで女性はこうしたカテゴリーに属していないから、我々はあなた方のおっしゃることを信じないわけにはゆかないのです。」といった調子で、非常にパンチのきいた論理の展開で臨時政府が女性に参政権を与えない矛盾についていく。

このように概して実際に労働している女性たちの平等の権利を要求するはぎれのよい論が多い。そしてさまざまの角度から男女の権利が如何に不平等であるかを実例のつみ重ねによって、論をすゝめていく。

『女性の現在の境遇について』(No 4) は民法を開けば野蛮な法律にみちており、女性は永遠に未成年扱いである。夫が死亡しても妻は自分で葬式をだす権利もないし、夫の遺言がなければ遺産相続人にもなれない。「民法には我々の義務と屈辱しか書いてない。権利はどこを探してもみつからない」というような身近な生活に即した訴えもある。

No 18 (4月9日)の『言葉の定義』と題するおそらくニボワイエのものと考えられる文があり、女性の権利という言葉は何を意味するかについて書いている。「それは銃をとって歩哨に立つことではないし、法律を破壊しにきたのでもない。むしろ法律を完全なものにしようとしているにすぎない。我々は平等という土台に我々の自由の原理をおき、その上で現状にあわせて必要ならばいくつかは譲歩もしようと考えているのである。我々はどうしてこれほどまで我々の権利が拒否されるのか理解できない。我々は洗礼も、葬式も、結婚も未成

年扱いで権利はない。また裁判所で被告の証人に立つことも認められていない。我々は参政権は拒否されているが、一方で共和国になるまでは、フランスでは女性の摂政によって治めることができたし、英國でもスペインでも女王によって現実に治められている。このような現実が存在していて、なお当然あるべきことを決定してほしいということが要求が過ぎるとでもいうのだろうか。」あまり挑戦的すぎないように、しかも諒々と説得するといった型のニボワイエ流の議論である。

一方『真の平等、完全な平等』と題した正攻法の議論もある。「フランスは共和国である。共和国とは社会の再生であり、社会とは男と女で構成されているのである。共和国によって宣言された社会再生の最も重要な原理は平等である。社会的平等。社会の全構成員の平等。……ところが男性のみが選挙権、被選挙権をもっているのは社会的平等に対する詐りであり、専制に外ならない。公共の勝利の結果を不当に独占しているのである。」

また J. Deroin の署名入りの論説は、「自由、平等、友愛が宣言されたのに、何故女には義務しか与えず市民権を与えないのか。女性は税金を免除され、国法に従わなくてもよいとでもいうのであろうか。市民たる息子の母親が奴隸であってよいはずはない。あらゆる特権が廃されたのに、人類の半分が他の半分を支配するのは不都合である」(No 7)。また No 10 でも我々があまり騒ぐと咎める人に知ってもらいたい。我々はあらゆる人々に同じ権利、公教育に同じ分前、結婚に権利の相互性を要求するにすぎない。こうしたもののが改善は男だけで作られた法律ではなされないと述べる。

『社会における女性の権利と義務』と題した No 42 の J. S. の文は 6 月事件の迫った時点でもなお執拗に、いやそれだから一層切迫した女性の社会状態の悲惨な実体を訴えている。「私は現状においてこのような重要な問題、女性の境遇の改善という問題を扱うのは苦痛である。それはこの問題に寛大な人々がなおあまりに少いからである。政府の無頓着から、或いは蔑視から、人々は女性の悲惨な境遇に心を動かされて立上ることはまだないのである。誰一人として女性を社会的に解放しようという計画をもった人がいない。」

その理由は簡単である。法律家、理論家、ユートピストの視点からみて女は

男性のために子供をつくることにしか役立たない存在だと考えているからである。

あなた方を育て、血をわけ、乳を与えてきた女性をあなた方は追払おうとする。あなた方のエゴイスムから政治をするのに女を必要としないと考え、あなた方は自分を強いと信じている。

93年の共和国は何故たおれたのか。それは女性への尊敬をもたなかつたからだ。だが女性の知性は創造主からくるのだ。

男性は法律を自分たちだけで、自分たちだけのためにつくった。司法のみでなく、道徳法や社会法までもつくった。もし女性が姦通罪を犯せば不名誉にまみれさせられ、男性は運がよいと考えられるだけである。

我々は気狂いじみた、或いは病に罹った精神の結実たる気狂いじみた夢を実現しようとは思わない。我々は地上にない幸福を夢みているのではない。我々は家庭の母の権利、子供を育てる権利を欲するのである。」女性はこうしてユトピスマを批判もあるのである。

こうした権利要求の声は何人もの執筆者の手で、繰返しなされているのであるが、この女性紙の紙上のみでなく、外に向って、他のクラブでも発言がなされたことが報告されている。革命後、いたるところでクラブづくりが流行となつたが、それでも女性が発言できるクラブは限られた例外的な存在であった。その一つ「リヨン人クラブ」で一人のプロレタリヤ女性が発言した報告がある。彼女はいろいろのクラブに行ってみたが、女性のために発言する声が一つもなかつたという前置きがあって、彼女は女性解放を要求する。女性解放の意味は、1)女性は男性の奴隸でないこと。2)国会に入れること。3)女性の権利を国会で議論し、偏見と戦うこと。4)家庭を管理する権利を得ることである。「民族解放クラブ」でも Jeanne Marie が発言を求める。「あなた方はポーランドやアイルランドの救済について議論しているが、あなた方の傍で貧しい娘たちが苦しみと飢えで死にそうなのです。まず彼女たちを救うべきです。」彼女の演説は満場の喝采を受け、失業女工のための募金をすることができた。更に彼女は女性が望むのは真面目な教育、あらゆる職につく権利、法律を知って子供の未来と幸福を守ることであると述べている。

Cabet の中央友愛クラブは最初に女性の入会をみとめたクラブである。そして3月29日カベは「女性は選挙権をもつべきか、国会への被選挙権をもつべきか」を議事日程にした。賛否両論が沸騰した、しかしカベは用心ぶかく自分の意見を述べることをさしひかえた。「この問題は微妙で大変むつかしい。この問題は全く新らしい問題であって、これを研究した人はあまりいないのである。そして、あらゆる点で無限に複雑であるので、今日私が自分の意見を述べないことに御諒承を得たい。」と逃げている<sup>5)</sup>。しかしNo11の「女性の声」はカベが女性の権利を擁護して勇敢にも発言してくれたとして、委員長 Niboyet、副委員長 Desirée Gay、書記長 Jeanne Deroin の名で謝辞を載せている。女性の参政権を問題にしてくれただけでも感謝すべき状態だったのであろう。

女性の権利の擁護者として終始変わぬ態度を示している数少い男性としては Olide Rodrigues がいる。彼は Saint-Simon の直弟子としてサン=シモン主義者の三人の教父の一人であつた。ニボワイエはサン=シモン主義を離れたあとも元サン=シモン主義者との交流は続けており、「女性の声」紙が株式制になった時、銀行家ロドリグは大株主になるなどの助力をもしている。彼はサン=シモン主義者の分裂のあと銀行や財政問題に専心し、貯蓄銀行、退職手当基金、互助協会などの実務を手がけていたので共和国成立後、立憲議会、立法議会でもよく諮詢された。P. Bastide によればロドリグは「憲法の一草案を起草し、第一条に構成員全員、男性も女性も選挙人及び被選挙人になりうることを定めた<sup>6)</sup>」と書いている。

フーリエ派の V. Considérant も憲法制定委員会で女性の参政権を擁護する発言したが笑いとばされて問題にもされなかった。神聖な国会で女性の権利を問題にするのは眞面目なことではなかったのである。更に元サン=シモン主義者 P. Leroux はサンドに大きな影響を与えたことで有名であるが、彼は最もフェミニズムを強く主張した人物であろう。1851年、市町村選挙に女性の投票権を提案したが否決され、「最も正しい、明白な主張が私のような弱い支持者一人であるというはどういう事なのか」と叫ぶ<sup>7)</sup>のである。

こうして第二共和国においても女性の参政権、市民権はあえなく否定されるのであるが、新しい時代の到来に喜び勇んだ女性たちは自分たちの権利請願

に市庁舎まで赴いている。

3月16日はすでに述べたように Antoine André de Saint-Gilles を代表とする、芸術家、女工、文学者、教師らが第一回の請願を臨時政府に提出した。Edith Thomas によれば、3月22日「女性の権利委員会」Comité des Droits de la Femme の代表が市庁舎に赴き Marrast に質問する。「あらゆる時代の経験から証明された原理、法律をつくる人間は自らの利益になるようにつくり、その結果この聖なる権利を奪われた者たちの犠牲においてつくられるという経験をふまえて、あなたたちは『例外なくすべてのものための選挙』を宣言されました。私たちがあなたにお聞きしたいと思って来たのは女性が労働者に関する権利の中に含まれていると同様に、この一般論の中にも含まれているのかどうかということです。私たちはあなた方が除外のカテゴリー（禁治産者受刑者）の中に女性という言葉を書かれなかったから一層知りたいわけです。」苦境にたたされたマラストは、臨時政府の未来を何ら拘束しないような返答をする必要に迫られた。それで女性は今まで参政権をもったことがないのでこのような重要な決定は臨時政府ではなくて、国会のみができるのであると逃げた。そして御婦人方の経済状態の改善に早速とりかかるという愛想のよいマラストの言葉に惑わされた請願者たちは、何ら確実なものをを得られなかつたにもかかわらず、満足してひき下った<sup>8)</sup>。しかし普通選挙も今までなかつたことであり、男性の労働者も今まで選挙したことがなかつたのであるから、全く同列の問題であって、ここで引退るべきでなかつたのである。「女性の権利クラブ」は M<sup>me</sup> Bourgeois なる人物が組織しているクラブで、詳細は不明であるが、Cloître Saint-Mery 街の自宅で会合を開いている。ついでにもう一つ女性のクラブとしては Société pour l'émancipation des femmes 「女性解放クラブ」というのが4月16日に Dr. Malatier によって組織されている。これにはジャンヌ・ドロワンやデジレ・ゲーも発起人に入っているようである。そして Tribune des Femmes というサン=シモン派プロレタリア新聞と同じ題名の新聞をだす予定であったが、Voix des Femmes が発行されたので同じ趣旨のものをだす必要がないとしている。

扱「女性の声」紙はこの女性の権利委員会の陳情について3月26日号No 6

で報告し、我々も第一号から同じ趣旨のことを述べてきたと言ひながらも、「我々が臨時政府に陳情にゆかなかつたのは、マラスト氏と同じように国会のみが我々の諸権利を確立する権限をもつてゐると考へるからである。」という矛盾にみちた表現がある。M<sup>me</sup> Bourgeois たちに先を越された対抗感情と見るべきなのか、何にしても臨時政府に完全に心服してバラ色の未来を期待できる時期であった。「女性の声」紙も早速独自のクラブをつくり Société de Voix des Femmes（または Club des Femmes）第一回会合を3月26日にもつてゐる。この会合では失業女工を援けるために（失業）女工一名、ブルジョア女性一名、国民軍兵士一名の三名一組のグループを各区につくり、募金をして区の失対基金に入れようという決議がなされた。第二回にも（3月30日）失業女工を助けるための富籤付コンサートが計画された。第三回4月3日もやはり労働問題を扱って会議録を残している。第四回4月1日、この日はデジレ・ゲーが国立作業場地区委員に選出された報告がある。第五回4月13日はクラブ規約ができる。第六回は4月30日の予定であるが「女性の声」紙が28日以後1カ月の休刊のため不明である。再刊後第七回6月3日、第八回6月5日、第九回6月7日と火、木、土に定期的に開かれることになった。しかし第九回で離婚問題が議題となり、男性の野次馬の妨害によって混乱し、警察の手で解散させられた。ところでNo 35、4月28日号に「女性の声」編集委員会の名で臨時政府に提出した請願書が *Conservateur de la République* 紙と *Salut Public* 紙に掲載されたとして二つの請願書の全文がのせられている。自分たちの請願書が他紙に載せられた後自分の新聞に報告するのも変であるがその内容は次のようである。

次に署名した「女性の声」紙の編集員は充分な討議を重ねた上、次のように考へるものである。

1848年2月の「栄光にみちた革命は一人の例外もなく全人類のための普遍的な愛の時代を開くものである。

この革命の使命たる平等と自由の制度はいかなる社会のカテゴリーに属するものに対しても奴隸の境遇をみとめるべきでない。

文明は妻に市民権と肉体的自由を認めることによってしか発展の第一段階に入ることはできない。

女性に与えられた自由の度合は、男性の自由と幸福の尺度となる。

族長、未開人、蛮族の時代は、女性に肉体的、精神的なあらゆる苦痛をおしつけた時代で進歩のない時代であって、男性のみでは文明の進歩がないことを証している。

基本的市民権が与えられたならば当然良識と公正な論理は女性に対し順次完全な解放を与えていくであろうし、これのみが共和国のモットーたる自由、平等、友愛に実質を附与するのである。

歴史は、適切な教育をうけた女性はあらゆる社会的、政治的仕事を果すことができることを証している。

いくつかの国の女性は現実に市民権を享受しているのである。

フランスが全世界によって、文明の母国と考えられたのは、我国の風俗が我々の法律よりも女性に対しより公正であったということであった。

成人のフランス女性の中で、非常にわずかなものしか、合法的、直接的な保護者をもてない。それは貧困の支配する社会にあって結婚が非常に少数のものにのみにしか可能でないからである。

こうした考察をもとにして臨時政府に女性の市民権の完全承認と、未亡人と未婚者に選挙権を直ちに認める法律を定めていただきたい。」

もう一通の請願書は選挙の時に大学や寄宿学校を休暇にしてほしいというものである。

これらの請願書は M. J. H. によって起草されたと書かれているが、署名した「女性の声」紙の編集者の中にニボワイエが入っているかどうかは不明であるが、こうした文の書き方はニボワイエの意に沿ったものと思えないし、陳情書をだすことも彼女はよしとしていなかったことからみると、彼女の同意なしになされた感がつよい。後日、彼女は、新聞の借金を一人で背おわされて、苦しい生活をしたこと、その新聞に自分の同意も得ず自分の名で印刷所へおくられ発表された論説もいくつかあるとなげいていることからも推察が可能である。これらの陳情書はとりわけ *Charivari* 紙の烈しい攻撃をうけたらしいが、編集部内部もその故でうまくゆかなくなったのではないかと想像する。次号の 4 月 29 日号から 1 カ月の休刊、そして再刊にあたって不用意な情熱にかられた何人

かの編集者を除外したと述べているからである。

## (2) 離婚制度

ニボワイエとしては離婚制度を扱うことは最も避けたいことであった。しかし No 14 (4月3日号) に「セーヌ＝アンフェリウール県に住む合法的に別居した女性による離婚制度の要求」がルアン市の壁にはられ、同県の「共和国委員フレデリック・デシャン氏に陳情の形でなされる」と報ぜられた。しかし「女性の声」紙では「今からもう離婚問題を扱うのは早計にすぎる。性急にしてはならないし、節度をもって原理をたてなければならない」とか「誰の為に離婚を要求するのかと言えば、うまくゆかない夫婦のためである。その他のものは恐れる必要はない。幸福は義務を甘いものにする」といった消極的な態度を示したのである。離婚制度は大革命時代の立憲議会で制定され、共和暦2年花月には非常に容易な手続きでできたが、共和暦3年熱月より厳重な手続が要求されるようになった。第一帝政期はこれを残しつづけたが、カトリック教徒の要求などもあって離婚の理由を一そうきびしいものにした。王政復古の1816年には廃止され、そのまま世紀末まで続く。

しかし立憲議会に司法大臣 Crémieux が離婚制度復活案を提出したことが No 37 に報ぜられた。二月革命直後、「公共の道徳は離婚制度の復活を要求する」という壁ビラが貼られていた。G. S. は言う。「これは意味深長な言葉である。離婚は道徳性の観点から要求されている。イギリスでもアメリカでもスイスでもこの制度は存在する。あなた方は広場では自由であっても、家庭へ戻って、もしも結婚がうまくいっていないなら、あなた方は奴隸であるし、あなたの妻は一そう鎖につながれている…」(No 37)。次号 No 38 では国会でこの離婚制度が議題になったと簡単にふれられている。No 39 ではヴァンドーム広場に集つて司法大臣クレミューに離婚制度復活を要求しにいった200人ほどの女性について騒擾的であるとして「女性の声」紙のニボワイエは烈しく非難し、彼女たちのクラブなどと関係がないと言明している。しかし No 40 には再び『国会への手紙』という G. S の文がある。クレミューは離婚制度復活の説明としてこの制度は1803～1816年まで存在したものと述べた。それについて彼女の

見解を述べるとして宗教、道徳、正義、人間の本性の四点からこの案に賛成する。宗教面からは特に上流階級の結婚は金が目的であって、借金を払うため、持参金目あてに結婚する。結婚の永遠の絆の解釈についても各国の物の考え方、風習によって異なるもので、歴史的にも多くの王の離婚を法王は認めてきた。一方、民衆の結婚が何故より幸福であるかというと相互の愛によって結ばれているからである。現実問題として離婚するのに女性は10年も待たねばならないし、その間不釣合な夫婦の間で子供への影響も大きい。離婚制度は92年に多くの血を流してかちとった法律である。」こうして国会で議論された離婚制度を女性クラブでもとりあげざるをえなくなった。

6月7日、不幸な女性クラブ第九回集会がコンセル会館で夜8時から「離婚制度」について開かれた。その後No 42号にニボワイエは書いている。「一週間前から男性は我々の集会をめちゃくちゃに混乱させ、解散させようと決意したかのようであった。そして当局によって集会が禁止された。我々は当局にこの措置を恨むものではない。自尊心のある女性なら、男性たちのこれほどの侮辱、暴力沙汰には堪えられないもので、自からこうした集会をやめたであろうから。」「我々は合法的な権利を慎重に節度をもって使っていいたのに粗暴な男性たちがその権利をとりあげてしまった。自由とは今や空しい言葉である。ただ一つ我々を勇気づけることは、我々の集会に対するあなた方の振舞いである。あなた方は我々の議論に耳をかそうとしない。それはあなた方が我々を恐れはじめたからである。我々の正しさを認めるより、圧迫する方がやさしいからである。あなた方の野次の下に専制主義がのぞいている。」

こうして女性クラブは閉鎖されたが、この集会を戯画化したいくつかの描写がある。しかしそうした諷刺の中にもニボワイエの犯しがたい威厳と信念がかいまみられるのである。またこれらの文は当時の女性クラブや女性運動家に対する一般人のイメージを写しだしていると思われる。

Maxime du Campは『1848年の回想』の中で女性クラブについてふれている。「女性たちはボンヌ＝ヌーヴェル通りの地下にクラブをつくった。ここで非難されているのはブルジョアではない。それは男性、夫、主人専制者（男）である。最も臆病なものも離婚を要求し、最も大胆なものはテスト結婚をすすめていた、

子供たちは父親にあづけられていた。ある元音楽関係の出版者につれられた数人の国民軍兵士がある夜偶然この秘密会議にゆきあった。丁度この時一人の女弁士が即刻無条件に離婚制度を確立してくれるよう要求しにいった代表団を愛想よく迎えたクレミュー氏の言葉を繰返しているところだった。この野蕃たちは——国民軍兵士のことだが——容赦なかった。何も彼らを止めることはできなかった。議長が勇敢にも彼らの頭にぶっかけたコップの水もある。不幸な女性たちは捕えられ、暗い廊下につれていかれて鞭うたれた。女性クラブは息たえた<sup>9)</sup>。」

Louis Reybaud の *Jérôme Paturet* では、こんな面白い見せ物をわずか一法兰でみられるというので皆見物したがる。だんだんプレミアムまでつき、やがては投機の対象になったかもしないと書く。(最初女性クラブは女性しか入れなかつたのだが、やがて女性25サンチーム、男性1法兰として、しかも女性によって保証された男性にしか売られないはずであった。)

壇上にのぼった年配の議長団に対しておどけ者が「おや、ここは女性クラブではないのか」と無邪気を装った声で言う。議長が「そうです」と答えて議事に入ろうとすると「それぢゃ、女をだせ」とどなる。男性の傍聴者は口々にそれに唱和することによって集会を混乱させる。悪ふざけやきわどい冗談がとびかう。そこで *Jérôme Paturet* の美しい女主人公 Malvina は壇上にのぼってこれを静肅にさせるという英雄的行為をする。議長は彼女に感謝し議事に入るが、弁士は女性と現代社会における女性の状態について話す、その後議長はよく準備されたお説教を延々とする。そしてクラブは小間使や女工たちの境遇をいやというほど知らされ、その上、地方の女織工の職さがしの方法まで聞かされる。Malvina はおそるべき退屈と空虚を感じながら議事進行を守ってやった上で最後に議長団に向ってあなた方人生経験の充分のある分別のある人たちが、ジャコバンクラブのトリコトゥーズのようなまねをして、女性を見せ物のようにするとは一体何ごとか。権利と言うけれどもあなた方の家を片附け、夫の靴下を繕い、子供を育て、女中に命令をし、料理がおいしくできるよう気をつける権利だけで充分ではないか、さあおわかりですね、こんなクラブは閉鎖しましょうといって万雷の拍手を得るところで終る<sup>10)</sup>といふ愚かしい一人よがりの文が

ある。

5月29日の*Lampion*紙は喜劇的クラブ探訪の一つとして女性クラブを載せている。

「離婚制度の必要性と正当性が拍手で賛成された。しかし細目やとるべき行動になると議論が百出した。……一人の女弁士が演壇にのぼる。

——皆さん私たちは離婚制度を要求します。

——賛成！

——しかも私たちが有利な立場になるように。私たちにとって容易なように、夫の側からは困難になるようにならしめよう。私たちが望めばできるが、私たちに都合が悪い時はしなくてもよいように。

——叫び声、騒音、烈しいさわぎ。

一人の男性（弁士の夫）が発言を求めるが拒否される。

シャテル師が長々とわけのわからぬことをしゃべり、唯一の理解できたことは結婚式をラテン語でなく、フランス語で挙行したいということだ。

ニボワイエはこの集会のレジュメをし、離婚は男性が自由に法的難問の結び目を切ることができてはじめて、女性の幸福が得られると述べる。」

*Illustration*紙はそれでも以上の例より悪意なくかなり正確にそして精細に伝えている。

「我々が入った時演壇にはまだ弁士がいなかった、事務局の何人かが坐っていた。帽子をかぶっていない二人の書記、頭布をかぶった二人の副議長が左右から、大きな流行おくれの帽子をかぶった議長、ニボワイエを囲んでいた。

たしかに議長としてこれほど適任な人は選べないだろう。エリート女性で骨の髓まで強く、いかなることにも彼女の考えを動搖させることなく、不屈の精神をもっている。すでに20年、30年いやおそらく40年も彼女はペンと弁舌で、本やパンフレットや新聞によって女性を解放し、女性を劣悪な状態から解放しようとしている。二月革命は当然彼女のすべての希望を再燃させた。この時より様々な要求に対処するための講座をつくり、新聞を発行し、あらゆる種類の女性のアソシエーションをつくった。週一回タランヌ街の会館で女市民ニボワイ

エは女性の新らしい福音を説く。誰も聞き手がなかったからといって彼女の落度ではない。彼女の新聞「女性の声」に関しては一ヵ月以上も続いた。もしも買い手や予約購読者がいたらまだ消滅しなかったのだが。それにこの新聞は実によく編集されていた！ ニボワイエ夫人の声に応じて集まった一群の若い編集女性たちは、新聞の中で広く且深い知識をもって女性の権利について男性の権利と比較して論じた。彼女たちは離婚制度の必要性をがっちりと論証し、自ら気前よくその実験をやってみようとしていた。

これほど広範囲な問題を扱った新聞は一握りのエリートにしか向かなかった。大衆はまだその高さにまで到達していなかった。『女性の声』は斜することなく消えてしまった。』

クラブに関しては「ひとりニボワイエ夫人のみがやや長く、しかし賢明に節度をもって話した。その時突然ドアがすごい物音と共に破られ、一群の狼藉者たちによつて会場は占領された。彼らは議長に対して何の敬意も払わなかつた。しかし彼女もへこたれず、叫び声や口笛やどなり声や愛国歌で妨害されながらも彼女は演説をつづけ、三つの基金援助を呼びかけた。『奥様方、女性が今後女性の権利と日常の要求を述べる機関紙がつづくよう私たちの新聞を援助して下さい。また二月革命によってあらゆる生活費を奪われた女性芸術家、画家、音楽家たちのアソシエーションのために援助して下さい。また最後に女中奉公人アソシエーションのためにも援助して下さい。今後このアソシエーションに入っている娘たちは互に行状をよくしあい、互に監督しあい、職探しを助けあうでしょう。彼女たちは傭主の信頼を得るようになるでしょう。そして傭主も彼女たちから尊敬を得るでしょう。彼女たちはもう奴隸ではなくて公務員であると感ずるでしょう。』筆者 (Alexandre Dufai) がこの二つのアソシエーションの有用性を認めてニボワイエを評価し、こんなに混乱させられた集会を残念に思っていると、シャテル師というのが勇敢にも演壇に上って女性の話を妨害する人々を咎め、女性の弁護をしたが、騒ぎはますますひどくなり、椅子はこわされ、窓ガラスは破られはじめた。』

このように筆者はかなり客観的に描写し、評価しながらも、大革命時の女性クラブをひきあいにして、女性は家庭に戻れとの Chaumette の言葉で結論

づける。

さて引用はこれ位にして、最後に「女性の声」最終号 No 46に離婚に関する Dr. Eugène Villens の見解を *Démocratie Pacifique* 紙から転載しているのをみよう。「魂を殺すと肉体も殺す。精神の嫌惡は肉体の全組織にあらわれる。」という生理面からみた離婚制度の必要性と共に財産管理に関する妻の権利の拡大、夫婦の権利の平等性を認めるべきだという論が述べられている。

### (3) 労働問題

二月革命は産業的商業的危機がかなり大きな要因になっていると言われ、革命によって更に経済状態は悪化した。資本の流出や工場閉鎖、破産が多く、一方で労働者のストライキ、賃上げ、労働時間短縮などの要求が烈しくなり、失業者も増大した。あらゆる問題が山積し、からみあい、うまく解決に導けない。

この新聞にとっても労働問題は焦眉の急を要する問題として毎号のようにとり上げられている。冒頭から『労働組織』と題して、生産産業における、才能と資本と労働のアソシエーションの必要性をまず説く。しかし共和国はまだ幼児であり、あまりことを急いですべてを破壊する。工場主の立場が危くなれば労働者の境遇も悪くなる故、ストライキをせぬよう、未来に対する信念をもって行動するよう説得する。

さて、労働問題、失業問題に対する臨時政府の対応はどうかということを一瞥しておかねばならない。失業問題の対策として二つの方法が考えられた<sup>11)</sup>。一つは従来からの ateliers de charité (失業者に道路工事など人夫的な仕事をさせて日給を与える慈善事業) もう一つは Louis Blanc がその理論をたてていた ateliers sociaux である。ところで臨時政府内には National 紙に属したグループ (Marie, Crémieux, Arago, Garnier = Pagès, Marrast) と ソシアリスト Louis Blanc、労働者 Albert と、Réforme 紙の Flocon を加えたグループの対立があり、その間に Lamartine, Ledru-Rollin が仲をとりもつ役として中心的な存在となっていた。ナシオナル派は七月王政の院内野党であってソシアリストとは全く相容れない立場をとっており、彼らは大蔵大臣、公共事業大臣をいち早く握って労働問題でラディカルな方策をとることを防ぐ手をうった。即ち

1830-1840年のストの折、企業主が労働者の要求を拒否すると、労働者はアンシアシオンをつくって企業主をボイコットする前例をつくった。こうした労働者の実験を理論化したのがルイ＝ブランである。労働者の要求する労働大臣を創設してルイ＝ブランに就任させることをさけるため、ナシオナル派は妥協策として Comission du gouvernement pour travailleurs、通称リュクサンブル委員会をつくり、各職業団体の代表を参加させ、ルイ＝ブランを議長、アルベルを副議長にして労働問題を研究させた。しかしこれは予算の裏づけも何もない諮問委員会にすぎなかった。リュクサンブル委員会は各職業別労働者代表者と傭主の代表を集めて労働問題の検討をしている。ここにおけるルイ＝ブランや労働者代表の議論は「女性の声」紙に載せられた意見にも色濃く反映している。革命直後の臨時政府時代は労働者の勢力がつよく、リュクサンブル委員会（3月1日から5月初めまで存在した）も機能したようで、労働時間の短縮（パリは11時間から10時間に、地方は12時間から11時間へ）や請負業者の介入廃止など委員会の要求がすでに政府の政令となって実行に移された。

一方公共事業相マリは ateliers de charité を設立する意図で、これに ateliers nationaux というまぎらわしい名をつけて、労働者をごまかし、15000人ほどを収容する予定であった。失業者の登録と支払いは区役所で行われ、長蛇の列をつくる混雑ぶりであった。地方の失業者もパリに上京して登録し、その数は膨大なものになり、6月には10万をこえた。二ヵ所で手当金をもらう者もあらわれる始末である。政府は有効な仕事を与えることもなく、失業者で道路工事にもあぶれたものは町をぶらついては給料をもらっていた。Ecole centrale 出身の青年技師 Emile Thomas が作業場を組織するのに登用され、マリの意に沿って行動してきたが、労働者の代表たちと交渉を重ねるうち責任を感じるようになり、有効な仕事の計画をたて、作事場の解散をさけようとした。それはマリの意図するところではなく、選挙後公共事業大臣になった Dr. Trélat によってトマは誠を切られてボルドーへ護送された。この間作業場を解体するにあたって、18歳～25歳の若くて、クラブの影響も少く、社会主义思想に汚染されていないと思われる若者たちを強制的に gardes mobiles という一種の軍隊に入らせ、軍隊的秩序を身につけさせた。近い未来にバリケートを築くであろう叛徒

たちに対処するためである。ところでこの国民作業場には、おそらく女性たちの請願の結果であろうか、女性部もおかげ、彼女たちはこのパリの遊動隊の制服をつくる作業をしていたらしい。そして6月事件のあともしばらくは存続していたという<sup>12)</sup>。

こうした政府内部での確執と一方で男性労働者と女性労働者の甚だしい労働条件の差など多くの問題をかかえている中で、「女性の声」は3月2日にリュクサンブル委員会のルイ・ブランに提出した請願を掲載している（No 2）。

「多くの孤立した女性が絶望的な状態にある。彼女たちが悲惨と不道徳にさらされることをあなたは望まないでしょう。良俗は共和国の力となる。そして良俗をつくるのは女性である。…今行われている（労働）再組織の中に彼女たちが位置を占め、アソシアシオンの原理が彼女たちの労働を勇気づけるようにしていただきたい。……具体的には、1)労働委員会の中に女性の労働組織を担当する代表が任命されること。2)失業婦人と善意の婦人（女性労働者を雇用しようとする婦人）が登録するリストを作製して公開すること。3)国営レストランと洗濯場が直ちにつくられ、婦人の労働を軽減できるよう。」要求している。

革命一ヶ月後の3月27日号では国の経済状況がますます深刻化してきたことを認識して、「共和国の経済を救うため秩序と平和の必要」性を説く。しかし街頭デモから作業場へ戻れといつても仕事場が閉鎖されて帰れない女工も多い。共和国の信用が回復するまで彼女たちの生活を保障する必要があるとして、すでに述べたように女工、ブルジョア婦人、国民軍兵士の三人一組による公的募金を提案する。10号では「失業中の女工たちが我々の支援を求めて事務局へきた。あるものは我々の募金活動に参加するため、あるものは仕事を求めて登録して来たのである。彼女たちの真摯な気持の証明である。もし我々の努力が成功すれば、やがて婦人のための作業場を組織できるであろう」という希望的観測がある。No 11の3月31日号では一女工D. G. (Désirée Gayであろう)から臨時政府宛てた書簡がある。「労働階級の改善のために政府委員の方々は努力をおられるが、女性労働者たちは男性のように旗をたて団体であなた方の支援を頼みにゆくこともできず、忘れられているようなので、この女工たちの階級にも目を向けていただきたい。」という書き出しで女工の窮状を訴え、

革命後、女工の多くは失業するか、低賃金に下げられ、弱い者に最もしわよせがきている。お針子の仕事は仲介女のせいで、もはや捨値のような仕事となつた。女工の不道徳について人々は喋々するが、女工たちが誘惑をさけるために涙ぐましい努力をしても、蓄えのない身にとって食物もなく、職もなく、病におかされれば墮落は必然のなりゆきではないかと女工たちの現状を語る。

女工たちの窮状、弱い立場が認識され、恐らく区役所で女性の失業問題のための集会をデジレ・ゲーが開いたのであろうか、これを克服するための方策が検討された。4月2日号の『約束したことを守る』という文で、デジレ・ゲーは「先週木曜の集会において多くの女工やあらゆる職の女性、様々の階級の女性の前で我々は女性の労働問題に直ちにとりくむことを約束した」と述べ「今後集会を継続的にもち、多くの女性の意見を聞き、女性の労働組織を研究し、これをリュクサンブル委員会へもっていく。」「理論や制度よりも現実を、一般意志をより重視して、経済危機を互助で切り抜けたい」という。

翌4月3日号には、前日2日に行われた「女性の声」公開集会の議事録が載っている。議長に Niboyet、議長団として Désirée Gay, Gabrielle Soumet, Deland, Jeanne Deroin, Susanne Voilquin, Sabatier ら中央委員会のメンバーがいる。その模様を簡単に紹介すると、

M<sup>me</sup> Duparc : 議事日程として労働組織問題をとりあげてほしい。

M<sup>me</sup> Gay : (昨日の自分の労働組織についての論説を読み上げた上) ここにいるすべてのブルジョア婦人が区役所に登録してその集会に出席してほしい。

M<sup>me</sup> Sainties : 提案、いくつかの作業場に失業中の女工を集め、そこへ仕事を(芸術家)  
与えることのできる人々は自分で仕事をもってきて、仲介を廃止しよう。

M<sup>me</sup> Gay : 国営の洗濯場や食堂をつくり、労働者が安く利用できるよう請願書をだした。また集会室や図書館もそこにづくりたい。

M<sup>me</sup> Duparc : 男女一緒に集会場に集まるのは風紀上心配である。

M<sup>me</sup> Gay : むしろ逆で家族がみな一緒に集まることによって意志の疎通ができる、女性が加わることによって、人々の心をなごませる。

M<sup>me</sup> Niboyet : 生活に必要なあらゆるものを持つ建物がほしい。

M<sup>me</sup> Lemonnier : この計画は政府に提出してあって、目下検討中である。

M<sup>me</sup> Foa : 20人のブルジョア婦人で「國立協会」<sup>アンスチテュ・ナショナル</sup>を構成し、ラマルチーヌ夫人の下で労働組織、貧しい女工対策を講ずる会議をもちたい。

M<sup>me</sup> Niboyet : それは慈善とか施しという名目でなされるべきでなく、彼女たちは労働の権利をもつということでなくては女性に独立と尊厳を与えることはできぬ。

M<sup>me</sup> Villemet : 政府は失業中の男性労働者に莫大な予算を使っているが、失業中の女性のためにも国立作業場をつくることが緊急の要である。洗濯婦たちはケール広場に集って、臨時政府に請願をだし、労働時間の短縮と賃上げを獲得した。すべての女工たちが職業別に団体をつくってこうした要請を政府にするべきである。

M<sup>me</sup> Niboyet : 洗濯場の女主人たちはこうした譲歩の結果、多くの洗濯婦の戦切りをせざるを得なかった。むつかしい現状では賃上げと時間短縮の両方を要求すれば洗濯場はつぶれるであろう。

M<sup>me</sup> Villemet : クリーニング代の値上げが必要である。

M<sup>me</sup> Niboyet : そうなれば多くの人が自分で洗濯をせざるをえなくなる。

M<sup>me</sup> Lemonnier : すでに何人かの人が自分で、或いは女中にクリーニングをさせるようになった。女工たちは集り協同しなくてはならないが、仕事に必要な手段を探すために限らなくてはならない。

M<sup>me</sup> Gay : 女工は区役所で開かれる集会に集って互いの利害を語り、互に理解しあうことが必要である。

M<sup>me</sup> Lemonnier : (政府の指導の下に女主人の搾取から女工を救うために大きな国立作業所をつくってほしいという一女工の手紙を紹介)

その女工が発言して、いかにその搾取のために女工が悲惨な目にあっているかを説明した上で、自分は一日20スウでよいかから、仲間の戦切りがないことを望むと言う。

M<sup>me</sup> Gay : (イギリスの女工とその作業場について話す。)

ここにみられるようにニボワイエは基本的にルイ・ブランらのリュクサンブル委員会の立場に近く、マリたち臨時政府の主流派の画策した ateliers de

charitéに批判的である。ateliers nationauxの創設者であったマリは後に、「私は社会主義者でない。私は労働の権利など信じたこともない！ 労働の権利を宣言した政令に対し私は従順に奉仕するつもりはなかった」<sup>13)</sup> といっており、労働の権利を説くブランの思想の敵対者であった。またキリスト教道德協会でニボワイエはラマルチーヌ夫人と慈善活動をしたことは前述のとおりであるが、彼女を否定することによって、屈辱的な慈善によってではなく、仕事をみつけてやることによって女工を助けねばならないという基本姿勢をみせている。そして失業対策を優先するところから賃上げとか労働時間短縮などの問題にも現実的な対応の仕方をしている。

No15では集会の議論をふまえた具体的な請願が E. Lemonnier, C. Laporte, S. Voilquin らによって政府委員に提出されたことが記されている。「我々は19年前からフォブル・サン＝マルタンで労働者たちのために保育園の仕事をしてきた。今政府が土地をみつけ、株主に保障を与えてくれれば、我々は労働者のために大きな家を作りたい。一階に保育所、幼稚園、読書室、風呂場、洗濯場、食堂などをおき、二階、三階に家族もちの労働者、四階に独身者が住むようにする。居住者は互助基金の醸出をして病人のための医者、産婆、安い薬品の便宜をはかる。娘のための職業学校もおく。こうした設備によって労働者が施しによらず生活できるようにしたい。こうした労働者たちの共同住宅はすでにニボワイエらサン＝シモン家族が1830年に実行してきたものである。

やがて「女性の失業者に対して国立作業場というよりも区立作業場が組織され縫製の仕事がここでなされることになった。パリの各区長は失業女工を集めて各区毎に5人の代表を選ばせた。彼女たちは区長に対し、ひいては政府に対し女工の利益を代表するものになった。そして区の失業救済金の支払いにあたった<sup>14)</sup>。」デジレ・ゲーは第二区の代表に選ばれ、「女性の声」紙の努力は無駄ではなかったと前途に曙光をみる思いであった。

しかし国立作業場は毎日莫大な費用を非生産的に浪費し、装われた施しであることは誰の目にも明らかであった。20号で、Elisa Greamailleは、勤勉な労働者をいつまでもこのような無為の状態にしておくと共和国の貴重な資金の浪費であるばかりでなく、労働者の精神状態を堕落させる。早速に農業及び工業

銀行を作つて労働者に労働の道具を手に入れさせるなり、技術者委員会を任命して未開墾地の開拓や運河開さく作業や鉄道敷設作業に従事させるなど対策をたてるべきだとの意見を述べる。共和国内の不協和音があまりにも明らかになってくる一方で、No 26（4月18日号）ではデジレ・ゲーが『パリ女工の代表』という題で、女子国立作業場の内幕を暴露し、監督たちの給与と女工たちの給料のひどい差とか、監督らがリベートをとるまやかしの組織だと内部の腐敗を攻撃する。女子作業場も結局は男性があやつっており、女子代表は形だけのごまかしにすぎないという強烈な批判を書いて、地区代表を馘になった。この内情は「恐れを知らぬ女市民」と自称する M<sup>me</sup> Bassignac の Volcan 紙という新聞にも具体的に痛烈に描かれている。<sup>15)</sup>

事態は切迫し、悪化していたが、なお女工たちの現実を改善しようと、具体的提案している女性もいた。女工たちの間の能力の差が問題であり、仕事を知っている女工と知らない女工を同数づつ組にして仕事をおぼえさせる。能力によって賃金をかえなくてはならない。家庭にとどまりたい女工には仕事を家庭にもちこめるようにすること。（No 29）

『神は人間が働くようにと創造された』で Claire J. が言うように二月革命はバリケード上から労働組織を要求した社会革命であり、アソシアシオンは流行語となった。「女性の声」が関係した、あるいは援助したアソシアシオンとしては、女中組合、ヴォワルカンが中心になった産婆組合、ドロワンが中心になった下着類女工組合などがある。

#### (4) 教育問題

女性の教育は「女性の声」紙の発刊の最も重要な課題であった。第一号に『女性の教育』と題するニボワイエの論説がある。元サン=シモン派 H. Carnot が臨時政府によって文部大臣に任命されたが、彼は小学校の義務化、無償化そして非宗教化を定めている。ルイ=フィリップ時代に Collège de France を罷免された Michelet の復職の外に、Legouvé による Collège de France での女性講座をもうけている。ニボワイエはカルノとはサン=シモン派時代以来の面識ある間柄であったはずで、教育改革に期待が大きかったに違いない。

い。その故であろうか注文も多く、カルノの出す政令には男性教師のことばかり書かれていて女性教師がなおざりにされると指摘している。一方、教師の社会的地位向上のためにはドロワンやP. ロランがその後運動を開始するであろう。ニボワイエはリヨンで女性のための学校を創設した経験からその実践をふまえた意見を述べている。「自由な民衆とは無智な民衆ではない」という冒頭の言葉、「教育によって王政時代のエゴイズムを払拭したい」「女性による女性のための特別な講座を開くこと、但し男性と同じ速度で異ったレールの上を走るよう」など、ニボワイエの一生もちつづけた教育観もある。「小・中学校の数を男子校と同じにする。各区に無料の成人講座を開く。」

ニボワイエはパリに来てからもタラヌ街で個人的に女性講座を開いていた。「この会場は100人の受講者を収容できた。この賃借料は一講座10フランで、受講者から入場料10サンチームをとって、我々は無料奉仕をして收支がうまくついていた<sup>16)</sup>」しかし『女性の声』発刊後、「何人かの気の短い人たちがこれに満足せず、クラブを目指して（何の目的かは知らぬが）私に相談もせず、Spectacle Concert のホールを借りて契約し、第一回の会合の日を定めてから私に報告した」というクラビストたちの独走を非難する回想記がある。ニボワイエの主催していた女性講座と女性クラブとの関係が判然としないが、4月21日号に第一回女性公開講座のレジュメが載っている。サン=シモン主義的発想をまじえて、時代を組織的時代と批判的時代に分け、18世紀が宗教感情のない批判的時代であったのに対し、19世紀を組織的時代と考える。女性問題に関して、女性は未成年扱いをされて権利が与えられていないという法律の欠陥をあげる。また国立作業場でも女工は一日12スウしか稼ぐことができず、パンを買う金も残らない。いわば生きる権利も与えられていないという事実を述べた上で、こうした合法的不法を正すために、女性が弁護士になって女性の利益を守るべきであると言う。また女性を国会へ送って法律を改正しなければならないことも述べている。これは選挙前のもので、彼女自身も積極的にことをおしすすめていた希望のもてる時期であった。

もう一つMarie Paulineの『我々を疑い、猿ぐつわをはめようとする人々へ』と題する文をあげれば、「女性は社会の風俗を左右するものであり、女性

を教育しなければ社会はよくならないこと、また未来の立派な市民を育て教える母たる女性に教育を与えては、よい市民が育たないこと、女性が能力において劣っているのではなくて、教育の機会均等を与えれば、女性も数学者にも技術者にもなれる」ことなど労働問題、市民権の問題と結びつけて、教育問題が論じられている。特に労働問題と深い関係をもつのが女工の職業教育であるが、この必要性を強く意識し、この時代の経験をもとに E. Lemonnier は職業学校を創設するが、彼女については別稿にゆずる。

### (5) 選 挙

いよいよ 4 月には初めての普通選挙が実施されることになった。女性にも参政権を与えよという M<sup>me</sup> Bourgeois のひきいる女権協会のメンバーが臨時政府のマリによって、体よく追払われたことは前述のとおりである。「女性の声」紙はこの政府の説明、選挙後の立憲議会で女性の参政権は論じられ決定されるということに賛意を表していたはずであった。その「女性の声」紙が George Sand を候補としてたてるという矛盾したこととしたのである。この経緯については、当初 Cabet のクラブなどでサンドを候補にたてたいという要望もあって、「女性の声」のメンバーがそれに同調したこともあるが、直接的動機としては、4 月 6 日号に次のように書かれている。デジレ・ゲーが国立作業場の第二区代表に満場一致で選ばれたことを報じ、「男性がすべてであった国で女性も何かになったのだ」と喜んだ。ゲー夫人が第二区の代表に選ばれたことにより我々の新聞は副委員長を奪われるが、女性の大義のために大いに役立つ、これだけにとどめず、更に輪を広げ前進しようと、「お針子女工はその使徒をもった。女性の思想労働者も使徒を選ぼうではないか、我々は時代におくれることなく、時代と共に歩まねばならない。我々ぬきで時代が進んでゆかないよう、我々も代表を送ろう。」という発想から、「我々皆の共感を得ている代表はいまでもない、サンドである。」「雄々しい点で男性的、詩と直感では女性である人、サンドを我々は指名した」「サンド自身も文学にデビューするにあたってジュルジュ・サンドと男性名を使った」という論理のすりかえによって、彼女たちはサンドの意志を考えることなく候補にたてるという勇み足をしてしまっ

た。男性もサンドを例外として国会に迎え入れるであろうし、彼女たち女性はこれを皮切りに女性の国会への道を拓こうと、未来がバラ色にみえていた。しかしサンドは「大切な一票をこんなふざけたことに無駄使いしないように」と「レフォルム」紙に書き、自分は女性クラブの看板にならないと拒絶する。以後彼女たちはエリート女性を断念し、地道に最善の方法を模索する。

選挙を前にして、あらゆるクラブで候補者推薦のリストがつくられ、候補者の信仰告白やパンフレットがとびかう、壁にはビラが所せましとはられ、パリの町は沸騰する。「女性の声」は我々は選挙権はないけれども、我々の利益を弁護してくれる社会主義者たちの推薦リストをつくり、父や兄弟、友人や夫に働きかけようと言う。そのリストには、Legouvé, O. Rodrigues, Lamennais, V. Considérant, Coquerel, Cabet, Constant, P. Leroux, Stourm, Ledru-Rollin, Louis Blanc, Marie, E. Sue, Carnot, J. Arago, Lacordaire, Albert, Vinçard, Jouy, A. Marrast, Flocon, Crémieux, Lagrange, Caussidière Esquiros, Ch. Romey, Christian, L. Hamel, Garnier-Pagès, Dupont (de l'Eure), Béranger, Lamartine Savary, Sobrier があげられている。No 23 (4月14日)。

4月18日にも候補者推薦の第一条件として、家庭と国家において立派に義務を果した人、その道徳性が重要であり、更に女性の大義に貢献してくれる人として、更に次の名をあげる。Brosset (靴職人) Arvuy (ラシャ製造業者) A. Perdiguier (指物師) Ponte (北部鉄道の夜番) という労働者を加え、Arago, Albert, Coquerel, Carnot, Constant, Cabet, Esquiros, Lamartine, Legouvé, Rodrigues. を再び推薦する。

更に選挙前日の22日には追加として Louis Blanc, A. Toussenel, L. Tourreil, Andrieu, A. Hamel, V. Considérant, Malatier, Ledreuil, Moriot, Fugère, A. Bonnard, Pellassy de l'Ousle, Grenier, Launette, A-Constant, Sobrier. がある。6月には補欠選挙がありその時は、Caussidière, P. Leroux, Proudhon, E. Stourm, Schoelcher, Vidal, Toussenel, O. Rodrigues, Cabet, Esquiros, Thoré があげられている。彼女たちは社会主義者イコール婦人参政権の味方という甘い観測をしていたわけで、Leroux, Considérant, Cabet, Rodrigues, Constant. などはともかく、Proudhon や Coquerel などむしろ女性の権利を拡張するこ

とに反対する人々も入っているのである。普選の結果については、保守派が大勢を占めたにもかかわらず、臨時政府のメンバーが全員選挙されたことに満足感を示している。

補欠選で Louis Bonaparte が選ばれたのに対し、ラマルチーヌなどが彼の国外追放令がまだ生きているとして無効を主張した。しかし昔のボナパルチストであるニボワイエの新聞「女性の声」はルイ・ボナパルトの選出の合法性を主張する。

4月29日から1ヶ月の休刊をへて、再刊された「女性の声」紙は「助勢しにきてくれた女性たちの不用意な情熱の故で約束を守らなかった」ので今後「編集者を厳選」すると述べられている。Deroin や Gay などの女工の署名入りの論説がなくなってしまい、書記長は Josephine de Besnier に代っている。分裂が生じたのであろうか、女工たちがニボワイエをおくれていると考えたのであろうか。しかし翌1849年、立法議会の選挙にドロワンが自ら立候補したのはニボワイエのすすめによるというドロワンの友人 Wild(Henriette artiste) の手稿がある<sup>17)</sup>。

ドロワンとゲーは「女性の声」終刊後 *Politique des Femmes*, つづいて *Opinion des Femmes* 紙を発刊しているが、ニボワイエはこれに参加していない。そして「女性の声」紙は46号 6月18-20日で終刊となった。

6月事件後の彼女の足どりとしては、9月にリヨンの女性のために「諸産業開発のための婦人友愛アソシエーション」を組織しその規約を作っている。その賛同者の中にニボワイエの妹、Juif 夫人、Morellet 夫人も入っている。この規約の梗概を述べよう。アソシエーションの目的は全員の利益の増大と幸福にある。信条として女子の従事するあらゆる種類の産業を開発する。そのためにいかなる人の自由をも束縛することはしない。それは決して共産主義の仕事ではなく、アソシエーションであり、各人がその能力に従ってその仕事に見合った賃金を受けとるとある。

女子労働者のアソシエーションは現実に応じた経験豊かな組織委員会の保護と助力によって運営される。アソシエーションはこの保護をうけるが、いかなるこ

とにおいても委員会の仕事に口をださない。アソシアシオンは販売店をもって、製造された品を売ることができる。アソシアシオンは事務局によって管理され、委員長1人、副委員長2人、書記4人をもって構成される。会員は作業場または自宅のどちらでも仕事ができる。サラリーは労働審査官によって定められ、最低1日1フランとする。アソシアシオンによって組織された作事場は一人の監督者によって監督され、一作業場100人をこえないことにする。それを職種別に20人に分け第一女工を組長とし、更に職場内の選挙によって週番をおく。朝7時～8時、夕8時～9時に女工たちのための初級クラスをおき、読み書きそろばんと道徳講座をおく。更に作業場に保育園、幼稚園をおく。以上が定款の輪郭である。このアソシアシオンは順調に発足して、多くの参加者を得、男子労働者アソシアシオン Association ouvrière masculine と連帶して機能していることが Considerant 宛手紙にみられる<sup>18)</sup>。ニボワイエはこうしてブルジョア婦人たちの醸出した基金をもとにして、民間の理想的婦人作業場を設立した。「女性の声」の労働問題の討議を実践に移したものと考えられる。後にドロワンと P. ロランらはこうしたアソシアシオンの連合組織をつくろうと試みるであろう。

しかしこのアソシアシオンが何時まで続いたかは不明であるし、その後 *Journal pour Toutes* 紙までの足どりは不明な部分が多い。「女性の声」紙の借金とこの時期に文部大臣の指示により年金がとりあげられたことによって生活が苦しくなったようである。パリ郊外の郵便局のポストがあったら与えて下さいとか（1848年10月）、また大臣あてに自分より金持ちの年金がとりあげられず、20年も人道主義的仕事をして誠実に働いてきた私のわずかな年金がとり上げられるのは不公平である、教育監督官のポストがあったら与えてほしいという手紙も残っている<sup>19)</sup>（1848年12月）。「日々の生活は苦しく、一人の女友達がなかったら大へんな重荷にうちひしがれたであろう<sup>20)</sup>」と書かれているこの婦人は Comtesse Baribe de Kaysaroff というロシア人で、彼女を妹のように思いあらゆる苦境を助けてくれた。

また1849年、リヨンの Vindry という労働者が整地の仕事の落札の件でパリに行つたが、6月13日、大統領暗殺計画の嫌疑をうけて逮捕された。彼と面識

のあるニボワイエは彼を弁護し、釈放するよう頼んでいる手紙があること<sup>21)</sup>から、なお彼女はパリの同じアパート (grande rue verte) に健在であることがうかがわれる。その後はパリの郊外を転々としたことが残された書簡にみられる。

彼女の息子 Paulin は1848年「女性の声」紙に『女性の権利』という連載小説を書いているが、その後副領事として Leipzig へ派遣されたり、アメリカのシカゴに派遣されたらしく、長らく帰国することができなかつたらしい。息子がパリに帰れるようとりはからってほしいという切々たる手紙が残っている。親戚の Eugène Mouchon 宛の一通の手紙は寄る年波のうかがわれるふるえる字で、息子に会いたいが、この年で海を渡ることもできないので、ヨーロッパ勤務になるよう息子の上司に会って話をしてくれという悲痛なものである（日付不明）<sup>22)</sup>。これらの書簡を読むと七月王政時代に道徳協会によって与えられた懸賞論文の年金をとりあげ、最愛の息子と遠く離れて暮すことを余儀なくさせた第二共和国に対する恨みや当時のにがい思いが滲みでており、七月王政への郷愁さえ感じられるのである。

その後の出版物として1862年に *Vrai Livre des Femmes* (正銘女性の書) をだしている。これは Comtesse Dash の *Livre des Femmes* の反論の形で書かれたもので、彼女の長い女性運動の経験にもとづいて、いろいろの角度から女性を考察している。しかし昔のフェミニストの鋭角的なものは薄れ、「男は政治、法律、国防、航海、商業のリスク、外交、女は道徳の聖域、家族の宗教、義務の維持、才能による平等」といった分業とか、「男は法をつくり、女は風俗をつくる」という Legouvé の言葉をおりこむなど昔の戦闘的な姿勢はない。ソフィーという理想的少女像を描いて、朝は家事の手伝い、昼間は学校の教師、絵画、音楽家、慈善家でもある一サロンでは気取らずに皆に歌を唱い、人に愛想よく、あまりお喋りはせず、議論もせず、人の話はよく聞くといったブルジョア優等生をすすめる。また金持ちの少女、既婚女性、民衆の娘、母親である女工、ブルジョアの母親、芸術家、女性産業家、女性教育家などの項目をもうけてエッセイ風に語っている。しかし平等を享受しているアメリカやスイスの女性とフランスの現状を比較するとき48年のニボワイエがもどってくる。

1864年10月から1866年まで、今度はブルジョア女性向きの家庭新聞 *Journal pour Toutes* 「全女性新聞」を発行する。しかしほとんどが *Vrai Livre des Femmes* の焼直しで、ジャーナリストとしての独創性の減退がみられる。

その後パリ・コミューンのあと、1875年、1877年、1878年にコミュナールの家族による特赦請願書に連署し、また投獄された女性たちを見舞い、援助する年老いたニボワイエの使徒のような姿を再びみるのである。

やがて長戻いのあと1883年に82歳でニボワイエが長い波瀾に富んだ一生を終えた時、息子の新聞 *La Semaine de Paris* に何人かの弔辞がのせられた。しかし48年の彼女の奮闘にふれるものは数少ない。

その前年に彼女の絶筆となった *Samuel* に Société nationale d'encouragement au bien 協会が賞を授与し、彼女の晩年を飾った。

こうして激動にみちたニボワイエの長い一生が終りをつけたが、彼女の仕事の価値を正しく評価するにはまだ長い年月が必要であった。ニボワイエは48年のフェミニズム運動を形づくった中心人物であり、そしてその運動もすぐれて48年人の特徴をそなえている。フェミニズム運動は大革命時代に生まれたが、しかしそれはパリにおいてはとりわけ突出した、個人単位のものであった。ルイ＝フィリップ王政時代の1830年には、様々なユートピスマ理論が広まった。その影響をうけて、とりわけサン＝シモン主義、フーリエ主義の理論からひきだされ、一人歩きをはじめたフェミニズムがさまざまの階層の女性に根を下しはじめた。こうした土壤がある上に、ニボワイエという実に適切な人材を得て、女性階級という横断的な階級を組織することができた。ニボワイエの経験と強靭な人道主義的精神と真面目な人格がプロレタリヤ女性とブルジョア女性のオルガナイザーとしての成功を得させたし、集団としての活動を可能にした。この集団は階層をこえて話しあう場を見出した。お針子の、洗濯婦の、産婆の、売春婦の、芸術家の、画家の、文筆家の、ブルジョアの奥方のそれぞれの立場を互に理解しようとする話し合いの場をもつことができたことは驚くべき成果である。ここにも48年の流行語となったアソシアシオンが影響しており、この思想と実践は女性にとってとりわけなじみやすいものであったといえよう。

ニボワイエは単にエリート女性の高みから慈善的行為をしようとしていたのではなく、プロレタリア女工の中に入り、職業婦人たちの中に入って、人間、女性の尊厳という立場から草の根運動を、アソシエーションを指導したのである。

「女性の声」紙の活動はさまざまのレベルで行われた。一つには大革命時代につくられたフェミニズム理論、自由、平等、友愛の原則にたった女市民の権利にもとづいて、直接的に参政権、市民権を要求する基本線がある。一方で現実の具体的方法として、いくつものグループになっていろいろの方向に働きかけた。政治的レベルで参政権を要求するグループ、それに倣する女性の能力の開発をするため、知的、また、職業的教育に力をそそぐグループ、現実の女工の物質的生活を改善する経済レベルに重点をおくグループなど考えられるあらゆる方向に活動した。

リヨンに住み、女工の悲惨な生活に身近に接してきたニボワイエは、これを改善しなければならないとの使命感をもち、地道に努力と経験を重ねた上、48年になってこれが彼女のジャーナリストとしての天職と見事に結びついて開花したのが「女性の声」紙といえるであろう。

### 注

- 1) 資料4。
- 2) 資料3。
- 3) A. Lucas : Clubs et Presses en 1848 p. 138。
- 4) Voix des Femmes No 1。
- 5) E. Thomas : Les Femmes en 1848. p 46。
- 6) P. Bastide : L'avenement du suffrage universel p. 28。
- 7) ロール・アドレール「黎明期のフェミニズム」p 266。
- 8) E. Thomas : op cit. p 36-37。
- 9) Maxime Du Camp : Souvenirs de l'année 1848. p 125-126。
- 10) L. Reybaud. Jérôme Paturot, à la recherche de la meilleure république. p. 268-285。
- 11) M. Agulhon : 1848 ou l'apprentissage de la république p. 44 以下の記述も同書による。
- 12) E. Thomas op. cit. p 56。
- 13) C. Schmidt : Des ateliers nationaux aux barricades de juin p. 15。
- 14) E. Thomas : op. cit p. 53。
- 15) 「国立作業場婦人部は女工の利益のためにつくられたのに、女工たちからすべて

の財産を奪うための巨大独占企業になった」「高価なヴェールに覆われた帽子を被り、ヴィヴィエンヌ街の店で買った大きなショールをかけ、足までかくれる長い絹のドレスを着た婦人ボス」「この作業場は情実の巣窟であり、共和国という言葉の否定そのものである」。

- 16) *Vrai Livre des Femmes.* p. 235。
- 17) E. Sullerot : *Journaux féminins et lutte ouvrière* p. 114。
- 18) Thibert : op. cit p. 203。
- 19) 資料5。
- 20) *Vrai Livre des Femmes* p. 238。
- 21) 資料8。
- 22) 資料13。

## 資 料

Bibliotheque de la Ville de Lyon : B. L.  
 Bib. Margueritte Durand : M. D.  
 Bib. Historique de Paris : B. H.

① B. L.

Lyon, le 7 aout 1833

Monsieur Eugène de Lamerlière

gérant du Papillon

rue Longue No4 Lyon

Monsieur,

Je croirait manquer aux procédés qu' on se doit entre gens bien nés, si avant de publier mon journal je ne recherchais la bienveillance et l'estime des publicités de notre ville! Rédaction d'un journal littéraire et homme du progrès, vous me tiendrez sûrement quelque compte des efforts que je fais pour éléver les femmes à la hauteur de leur siècle ?

Puis-je espérer qu' à cette titre vous ne dédaignerez pas de collaborer activement à mon oeuvre ?

Si vous le trouvez bon, nous échangerons nos journaux ? je sais que ce sera, en toutes choses, recevoir bien plus que je donnerais, mais je me réserve d'aquitter mes arrérages par un juste tribut de reconnaissance !

En attendant l'honneur de vous voir. veuillez, je vous prie monsieur, recevoir l'assurence de ma parfaite considération et me croire, en toutes circonstances,

votre bien dévouée,

Eug-ie Niboyet

14 rue Royale

Directrice du Conseiller des Femmes

② B. H.

le 24 mai 1839

Monsieur Cassin

12 rue Taranne Lille

La semaine a été mauvaise pour moi, j'ai à payer, personne ne me paye et ceux qui la font me donnent des billets dont je ne peux tirer parti n'entend pas dans le commerce.

S'il pouvait le faire que dans votre obligeance vous puissiez m'avancer les fonds du billet ci-joint je m'engagerais en cas de non payement, à le rembourser et vous resteriez vous-même nanti de cette petite somme par mon prochaine trimestre auquel je prend l'iengagement de ne pas toucher tant que le billet ne sera pas échoue. Le ministre de l'instruction publique m'a, vous le savez, accordé une pension, mais je ne commence à la toucher que le 1er juillet et quoique je gagne beaucoup, ma dernière association m'a tant

couté que je serai gênée au moins six mois encore; malgré cela j'ai toujours fait honneur à mes engagements et c'est pour ne pas déroger que dans mon embarras momentané, je m'adresse à votre coeur, croyez que je vous serai reconnaissante de ce service et comptez-moi, je vous prie au nombre des personnes qui vous ont voué la plus parfaite estime

votre bien dévouée  
Eugénie Niboyet

P. S. Si ce billet n'était pas payé, je le soldrais, je le repète.

(3) B. H.

27 février 1843

Le Marquis de Rochefoucault-Liancourt

56 rue St Lazare

Monsieur Le Marquis,

Je vous remercie des trois lettres que vous m'avez envoyées. j'ai rencontré M. Jaydans une soirée vendredi dernier, il a bien voulu me donner beaucoup d'espoir mais on n'est sûr que quand on tient.

Il paraît que l'opinion du faubourg St Germain est de plus en plus favorable à Monsieur Pinette pour la directron de l'Odéon, ne croyez-vous pas que ce que concilierait tout, la subvention accordée ce serait la nomination de M. Leroux, par M. Cavé au poste de commissaire royal ? Je sais bien qu'on pourrait mieux choisir, mais il y avait aucun inconvenient à ne pas le faire et par ce moyen toutes les difficultés seraient levées, M. Pinette, si je l'ai bien compris, ferait un théâtre morale de l'Odéon. La pure tragédie la saine comédie, la drame honnête, voilà ce qu'il accueillerait et cet exemple de Paris ne serait pas perdu pour la Province.

J'ai donné un exemplaire d'Agrippine à M. Pinette, il l'a lue deux fois et en a été enchanté, cette pièce montée par lui aurait bien un autre succès.

Le comité des orphelins m'a convoquée hier par l'organe de son secrétaire M. Tallerat pour la réunion de la comission appelée à organiser la lotterie. Je ne suis allée ni n'ai répondu mais cela me prouve qu'ils ne le tiennent point pour battus.

Dussions-nous commencer par n'avoir qu'un enfant, nous devons plus nous réunir à eux.

Veuillez m'écrire Monsieur le Marquis,  
votre bien dévouée  
E. Niboyet

④ B. H.

L'Oeil du Diable

FURET

Des Salons et des Coulisses

Grande rue Verte 34

Paris, le 6 fév. 1846

Monsieur,

J'ai écrit sous ce titre Mademoiselle Clairon une comédie en acte en vers que je voudrait donner en lecture à l'Odéon. Je suis assez malheureuse pour que peut-être vous ayez déjà quitté la direction sans que M. Aizentine l'ait encore prise. M. Emile Deschamps, et quelques autres poètes, me crient courage; moi qui n'ai jamais eu de bonheur je doute du succès et n'ose pas même avancer, Si vous faites lire encore, Monsieur et que votre bonté me protège, je vous porterai ma pièce, vous la jugerez, une 1/2 heure suffit pour cela.

J'attend un mot à ce sujet et je vous prie de me croire avec la plus parfaite estime  
votre très humble servante

E. Niboyet

P. S. que vous fassiez ou non lire ma pièce, je compte publier ce mois-ci, dans l'Oeil du Diable, une appréciation artistique sur vous. J'ai déjà celles de Roger, de George Sand, je vais donner celle d'Emile Deschamps, si vous désirez me transmettre quelques notes sur la vôtre, j'en ferais mon profit.

⑤ M. D.

la voix des femmes

24 grande rue Verte

Rédaction

Paris, le 29 sep. 1848

Monsieur,

Dès mon arrivée de Lyon j'ai eu l'honneur d'écrire à M. Considérant en lui reconnaissant de publier dans sa Démocratie après d'avoir déposé en double à l'Assemblée Nationale, la lettre que les Femmes Lyonnaises adressaient aux représentants qui s'étaient montrés favorables à l'abolition de la peine de mort Les Statuts de l'Association Fraternelles des Ouvrières.

Lyonnaises que j'ai organisées étaient joints à cette pièce qui portait parmi tant d'aures signatures, celles de mes deux soeurs, Medames Juif et Morellet. j'ai envoyé le tout par un commissionnaire fidèle, mais il peut être trompé. dans le doute, je vous envoie un double de l'adresse. Je regrette de n'avoir plus de Statut.

Agréez, je vous prie, monsieur, l'assurance de ma parfaite considération

votre très humble  
Eugénie Niboyet

(6) B. H.

La Voix des Femmes  
Journal Quotidien  
34 Grande rue Verte

Paris, le 29 oct. 1848

Monsieur le Directeur Général,

Le Ministre de l'instruction publique m'a enlevé une pension littéraire acquise au prix de 20 années d'honorables travaux et de 10 ouvrages couronnées. On a voulu faire des économies aux dépens des plus pauvres pour conserver à d'autres des droits qui leur assurent le superflu. Depuis 20 ans j'ai tout sacrifié à la cause humanitaire; depuis 8 mois je me suis ruinée et je regarderai comme un bienfait, Monsieur le Directeur général, si vous m'accordez un bureau de poste dans une banlieue de Paris.

Dans cette attente je me dis avec la plus parfaite considération,

Votre très humble servante  
Eug ie Niboyet

(7) B. H.

Paris, le 26 dec. 1848  
A Monsieur le Ministre de l'Intérieur

M. le Ministre,

20 années d'honorables travaux littéraires, 10 ouvrages couronnées et maintes services de bienfaisance n' ont point empêché Monsieur de Vaulabelle de supprimer, à la plus pauvre des femmes de lettre une modeste pension de 800 fr. touchée sur le budget de l'Instruction publique, j'ai réclamé ce qu'en conscience, je considérerais comme un droit et non comme une faveur. Il m'a été répondu que j'étais comprise dans une mesure d'économie. D'autres plus riches et plus rétribuées ont été maintenues, j'aurais donc droit à une compensation et s'il est dans l'enseignement une inspection que vous puissiez m'accorder, Monsieur le Ministre, je remplirai mon devoir avec zèle et dévouement, Votre très humble et très obéissante servante

Eug-ie Niboyet  
34 Grande rue Verte

(8) B. H.

26 août 1849

Monsieur,

Je sais que vous aimez à rendre justice et je viens vous fournir l'occasion de pouvoir

une fois de plus.

Le sieur Vindry, de Lyon, arrêté à Paris le 13 juin à 4 heures du matin sous prévention de vouloir attenter aux jours du Président de la République, en réalité venu soliciter des travaux d'adjudication au nom d'un certain nombre d'ouvriers qui ont mis en lui leur confiance.

Vindry, tout ce que j'ai entendu de lui me porte à croire c'est un homme essentiellement pacifique. Il n'a d'autres désirs que d'être utile à ses frères du travail et s'il se fut trouvé à Lyon le 13 juin, il eut, très probablement empêché des ouvriers de faire les barricades.

De Lyon moi-même, je crois remplir un devoir en portant à votre connaissance ce que je crois être la vérité. J'ai vu Vindry deux fois à Lyon et deux fois à Paris. Il en a toujours paru entièrement occupé de son système de travaux par doit et avoir. Il voulait faire crédit à l'état et aux compagnies adjudicataire pour la moitié de prix des travaux accomplies. Un homme absorbé dans de pareilles combinaisons a-t-il pu médité un crime sans but une atrocité inutile ?

Vindry était connu d'un homme dont le caractère conciliant a toujours contribué au maintient de l'ordre à Lyon, je veux parler de Monsieur Arlès Dufour. C'est sur cet honorable négociant qu'il comptait pour obtenir du ministre des travaux publics une concession de travaux de terrassement.

Je n'ai, monsieur, pris conseil que de moi-même pour m'adresser à votre justice. Vindry ignore ma démarche. Si comme je l'espère mon témoignage est utile à la cause, vous obtiendrez sa mise en liberté et c'est là mon but.

J'ai dit ce que je crois être la vérité, à Dieu ne plaise que je veuille tromper la justice pour faire absoudre un coupable, elle tient la balance et jugera, mais j'espère que du poids de ses opinions sortira l'innocence de mon recommandé.

C'est tout ce que je sais, Monsieur, si vous désirez l'entendre de ma bouche je me ferais un devoir de vous le confirmer.

Veuillez me croire, je vous prie, avec la plus parfaite considération

Votre humble et très obéissante servante

Eugénie Niboyet

(9) B. H.

Paris le 3 avril 1853

Monsieur,

Mon fils qui dans vingt lettres me fait votre éloge, vient de publier dans Glaneur Français de Leipzig un article sur vous. C'est un démenti formel à l'accusation injuste porté jadis contre lui, atteint mais non convaincu de vous avoir été contraire. Dans le temps, Monsieur, vous avez été excellent pour moi. l'ingratitude n'est ni dans mon coeur

ni dans mon sang et si un journal qui m'a chargé de toutes sortes d'énormités dont je n'étais pas coupable, a pu s'en prendre à votre nom, c'est que mes plus cruels ennemis étaient ceux là même qui mettaient leurs absurdes propos sans la responsabilité de mon nom.

En 1848 on a envoyé mon fils, en qualité de chancelier à 6000 lieus de moi. Il en est retenu par suite d'un conflit politique et on l'a envoyé à Leipzig où il vegète aux appointements insuffisantes de 2000 fr.

J'avais moi, une indemnité littéraire obtenue après 20 ans de travaux ingrats et 10 ouvrages couronnés, on m'en a privée en 48. Mon fils, dont tous les goûts sont si littéraires, avait comme moi un culte pour ce nom d'Orléans, il ne s'est Dieu merci, mêlé à aucune coteries politiques, son cœur est resté pur et dans son triste oeil il a écrit les livres que je vous prie d'agréer en son nom si vous les jugez dignes d'un mot de votre plume, vous rendrez bien heureux leur auteur et sa mère.

Notre voeu, notre désir constant est de nous réunir. 1200 f. à Paris rendraient mon fils indépendant, avec 6000 f. à étranger il serait toujours esclave et séparé de sa mère. Si par vos protections vous pourriez, Monsieur, lui procurer un commencement de position littéraire vous ajouterez beaucoup à la reconnaissance déjà si grande de

Votre bien dévouée

Eug-ie Niboyet

34 rue de Penthievre

⑩ B. H.

Courier de Paris

du Journal de saint Petersbourg

et du Contemporain Russe

18 rue Cassette

(Journal de St. Persbourg Journal officiel de la Cour de Russie)

Paris le 5 déc. 1853

Monsieur,

Je recours à votre bon vouloir pour m'obtenir de l'administration des Italiens l'entrée que je sollicite. Les messieurs pensent sans doute que mon courrier de Paris pour St. Petersbourg ne peut en rien servir ni leur théâtre ni leurs auteurs, ils se trompent je sais [...] non seulement en Russie, mais en France par les Russes qui continuent à recevoir ici leur journal. Et puis n'est-ce rien pour les artistes qui ont chanté à St Persbourg ou pour ceux qui un jour peuvent chanter, de savoir qu'on leur est favorable dans les deux journaux les plus goûtés ?

Je recommande mes intérêts à votre éloquence et le fais d'autant plus aisément que je contenterai soit d'une ou deux places aux 3e loges, soit d'une stable à côté de mon

amie Mme de Jasikoff,

P. S. je vous prie de me rappeler du bon souvenir de ces dames et de ces messieurs.

⑪ B. H.

Paris, le 25 avril 1863

A Monsieur de Courcelles, Inspecteur Général

Monsieur,

Vous avez été si parfait pour moi, que je viens, avec confiance, sans demander s'il ne vous serait pas possible de me faire accorder des travaux de journalisme ou d'autres ?

Je viens d'écrire à Monsieur le Comte Treirhard et sans vous nommer, sans m'appuyer de votre nom, je lui rappelle les sentiments de bienveillance que me témoignait Monsieur Jenhaus.

Je n'ai pas encore touché un sou sur mon livre des femmes. Les livres ne se vendent que si les journaux en parlent. Ils m'ont rien dit du mien, il reste là.

3000 f. m'eussent suffi pour commencer le Journal pour Toutes. Je n'ai pu le faire...

Depuis six semaines j'ai pris part à la collaboration d'un petit journal la Sentinel  
Parisienne. Si j'avais à donner là 5 ou 6 fr. on m'associerait, j'améliorerais et peut-être le  
Journal prendrait-il de l'importance. Malheureusement il s'en manque de 600 fr. que je  
puisse les aider.

Je joins ici, Monsieur, comme spécimen en ce genre, deux numéros de la Sentinelle, J'ai besoin de gagner ma vie en travaillant, ne pourriez-vous me faire obtenir des travaux? Si cela se peut, je vous en serai très reconnaissante.

Votre éternellement devouée, obligée

Eug-ie Niboyet

## 4 Grande rue des Bastignolle

(12) B. H.

Le Journal pour Toutes  
rédaction administration  
no 46 rue de la Victoire  
Cabinet de la rédaction e

Paris, le 4 février 1865

M. Piedagnel, homme de lettres  
no 49 rue Taitbout, Paris

Monsieur et cher collaborateur,

Vous me demandez de vous fixer une date pour le payement de vos chroniques. Notez donc que je vous les payerai au prix de vingt cinq francs, à partir de votre première chronique d'avril.

Je regrette de ne pouvoir faire plus, J'apprécie comme je le dois le concours que vous me prêtez, mais de ma part jusqu'ici, tout est sacrifice et cela peut se continuer long temps, A mon âge on n'ennuye pas l'avenir, ce qu'il y a de certain, c'est que le jour où le succès aura couronné mes esperances de moi-même et sans y être poussée je rémunererai mieux mes collaborateurs.

J'espère que nous resterons longtemps ensemble, si Dieu me prête vie, vous rendrez donc, tôt ou tard justice à mon caractère et je vous prie de me croire avec autant d'estime pour votre personne que de confiance en votre talent,

Votre bien dévouée

Eug·ie Niboyet

P. S. Il est bien entendu que vos charmentes chroniques continueront à entretenir mes lectrices, deux fois par mois, sans préjudices des vers et nouvelles que vous pouvez me donner de temps à autres.

(13) B. E.

Paris le 3 août '71 (?)

Monsieur ou Messieurs,

Mon fils qui écrit au Journal le Nord comme à sa peau, plus qu'à sa peau peut-être en raison de ses bons rapports avec vous, me charge de vous voir pour vous demander en son nom une service que vous êtes en mesure de lui rendre. Il s'agirait de voir pour lui, le plus tôt possible, un homme excellent, Monsieur de Meurant, que vous connaissez l'un ou l'autre, et qui, ayant déjà fait beaucoup pour mon fils, m'a laissée espérer qu'il ferait d'avantage !

Paulin n'a jamais aimé Chicago, ville sans importance, peuplée d'Allemands, et à laquelle suffirait un simple agent consulaire. nous désirions lui et moi nous réunir, mais craint pour moi, à mon âge, la traversée de l'Océan et je suis pour la plus large part dans son voeu d'un retour en Europe.

I'ai de nombreux amis en Russie, une dame Barbe qui, depuis trente ans est après mon fils ma plus chère affection, m'a fait juger et apprécier ses nationaux ! Mon fils tout jeune a été pénétré de mes sentiments et les a partagés. Il serait donc heureux d'être renvoyé dans la patrie de celle qui fut, avec une [...] sollicitude, ma providence et mon amie !

Si donc Monsieur ou messieurs, voyant Monsieur de Meurant., vous pourriez savoir où mon fils sera envoyé, je vous saurais un gré infini m'en écrire un mot [...] de là du mois

d'août la mer est mauvaise il faut donc s'embarquer vers le 15 pour arriver le 30, si l'on envoie mon fils à Boston, il faut que je me hâte de partir, s'il revient en Europe, il aura juste le temps de traverser avant la mauvaise mer et je cours la chance d'être séparée de lui encore une année...

Je vous en conjure donc, Monsieur ou Messieurs, ayez la bonté de voir pour mon fils Monsieur de Meurant, son chef et son protecteur. Il m'a fait espérer, l'Europe, si ce pouvait être la Russie...

Il est juste, qu'il dispose; mon fils s'en remet à vous du soin de servir ses intérêts et et personnellement je vous prie de me croire, avec la plus parfaite estime,

Votre très reconnaissante  
Eug-*ie Niboyet*

4 avenue Clichy

### **Bibliographies**

- Conseiller des Femmes 1833/11-1834/9
  - Mosaïque Lyonnais 1834/10-1835/1
  - La Paix des Deux Mondes, l'Avenir 1844/2-9, 1844/10-1845/2
  - Citateur Feminin 1835
  - La Voix des Femmes 1848/3-6
  - Journal pour Toutes 1864-1866
  - Association fraternelle des femmes ouvrières pour l'exploitation de toutes les industries  
17 sep 1848
  - Souvenir d' Enfance 1841
  - Abolition de peine de Mort 1836
  - Les Aveugles et leur éducation 1837 éd. Krabbe
  - Vrai Livre des Femmes 1863
- 

- Oeuvres de Saint-Simon et d' Enfantin 1~13 vols Dentu 1866
- H. R. d' Allewmgne : Les Saint-Simoniens 1827-1837 Lib. Gründ 1930
- Louvencour : de Henri Saint-Simon à Charles Fourier
- J. Gaumont : Histoire générale des corporations en France 2 vols. Fédération nationale des coopérations de consommation 1924
- l'Echo de la Fabrique 1831-1834 Edhis
- F. Rude : Le mouvement ouvrier à Lyon fédérop
- F. Rude : Les Saint-Simoniens et Lyon (Revue d'Histoire de Lyon)
- J. Godart : Le journal d'un bourgeois de Lyon en 1848 P. U. F 1924
- N. Lieutier : Madame Eugénie Niboyet (La vie Domestique 16 mars 1880)
- M. Thiber : Le Feminisme dans le Socialisme Français Marcel Giard 1926

- E. Sullerot : Jounaux féminins et la lutte ouvrière (1845–1854) Bib. de la Révolution de 1848 Tome XXII 1966
- E. Thomas : Les Femmes en 1848 P. U. F 1948
- L. Abensour : Le Problème Féministe éd. Radot 1927
- A. Lucas : Les clubs et Les clubistes éd. Dentu 1851
- L. Reybaud : Jérôme Paturot, à la recherche de la meilleure des républiques Michel Levy 1848
- Levasseur : Historie des classes ouvrières et de l'industrie en France de 1789 à 1870 AMS Press 1969
- E. Dolléans : Histoire du mouvement ouvrier 1830–1871 Armand Colin 1967
- C. Schmidt : Des ateliers nationaux aux barricades de juin P. U. F. 1948
- P. Bastid : l'avènement du suffrage universel P. U. F. 1948
- M. du Camp : Souvenirs de l'année 1848 Lib. Hachette 1976
- M. Agulhon : 1848 ou l'apprentissage de la république éd. du Seuil 1973
- M. Albistur D. Armogatthe : Histoire du féminisme français éd Des Femmes 1977
- E. Sullerot : Histoire de la presse féminine en France des origines à 1848 Armand Colin 1966
- L. Blanc : Révolution de février au Luxembourg Michel Levy 1949
- Wallon : La Presse de 1848 éd. Pillet fils ainé 1849
- M. Thibert : Saint-Simonianes et pacifistes E. Niboyet & Pauline Roland
- M. Buffenoir : Le féminisme à Lyon avant 1848 (Revue d' Histoire de Lyon)
- F. Ponteil : 1848 Armand Colin 1937